

薬草だより

橋本竹二郎の植物画紹介

その11

樋口 剛央*

トチバニンジン (ウコギ科)

Panax japonicus (Araliaceae)

生薬名：竹節人参 (チクセツニンジン)

花期は6～8月。日本各地に自生する多年性草本である。外形は人参の基原植物であるオタネニンジン (*P. ginseng*) によく似ており、茎は根茎の先端から1本だけ直立して、高さは50～80cmに達する。茎頂から長柄を出し、その先に径約3mmの淡黄緑色の多数の小花からなる球状の散形花序を付ける。秋には球形の液果が赤く熟す。通例、湯通しした根茎を薬用部位としており、健胃薬、鎮咳去痰薬などに配合される。根茎先端の茎の残痕が結節となり、1年に1節ずつ生長するので、その節の数から生育年数が推定される。また、その形状が竹の地下茎に似ていることが竹節人参と呼ばれる所以である。根は肥大しないため、根茎を薬用とする。しかし、オタネニンジンとは根茎が肥大せず、根を薬用とするため、生薬の性状は大きく異なる。処方では柴葛湯加川芎辛夷に配合されており、木防已湯には人参の代わりに配合できる。



ナンテン (メギ科)

Nandina domestica (Berberidaceae)

生薬名：〈果実〉南天実 (ナンテンジツ), 〈葉〉南天葉・南天竹葉 (ナンテンヨウ・ナンテンチクヨウ)

花期は5～6月。花軸が伸び、径約6mmの小さな6弁の白い花が円錐状に多数咲く。葉は3回羽状複葉で互生し、小葉は長さ5cm、幅2cmほどの被針形で、濃緑色でややつやのある革質である。中国原産の高さ1～3m程の常緑低木で、西日本や四国、九州などの暖かい山地では自生も見られるが、渡来した栽培種の野生化と考えられている。晩秋から冬にかけて7mm前後の球形の果実が真っ赤に熟す。やや大きめで、黄色味を帯びた白色

のものはシロミナンテンまたはシロナンテン (*N. domestica* forma *leucocarpa*) と呼ばれており、いずれも生薬として用いられ、薬効に差はない。ナンテンの名が「難転」に通じることや、赤い果実が長く木から落ちないことから縁起が良いと好まれ、正月飾や家紋に用いたり、魔除けや火災除けとして植えられることもある。このため、庭木や生け垣として目にすることが多い。葉はさらに防腐、殺菌目的も兼ねて赤飯などに添えられる。古くから民間薬として、百日咳や喘息などの咳止めに用いられるが、果実を使用するのは日本独自と考えられており、配合処方はない。



橋本竹二郎

元松浦薬業株式会社顧問

来歴

1931年東京に生まれる。

牧野富太郎氏らと親交。津村研究所 (現ツムラ)、名城大学薬学部、富山大学和漢薬研究所のほか、複数の製薬会社の顧問等を歴任。

2018年9月27日逝去。

主な著書

「立山路の花しるべ」(共著、巧玄出版、1977)、「北陸の自然誌」(里見信生 編著、巧玄出版、1979)、「目で見る薬草百科-見分け方・採取時期・薬効と使い方」(永岡書店、1984)、「薬草・花を描く-ハーブドローイング植物画を楽しもう」(日貿出版社、1994) ほか